

「自宅建築後始末の記」

(2012)

32歳の時自宅を建てた。入社して未だ10年では建築の経験上やや不足の面はあったが、感性と体力は今思い出すにつけ最も光っていた時期ではないかと思う。豊富な経験と深い人生感に根ざした住宅はそれなりにすばらしい、それはそれでいい、現に今僕がこの土地に改めて自宅を建てるのを想像してみると真に面白い。自宅建築の面白さは「自分のものを自分で設計する」という事だが、一番の本質は何と言つてもその金を出すのも自分の財布から・・という事に尽きる。もちろん会社の建物でも、お客様から依頼された建物でも経済設計といふのは最重要課題ではあるが・・。

我が家家の設計上のコスト・プランニング

- ① 職人仕事に高いお金を払わない（変な）だわり設計・造り込み設計をしない・・多くの人から賞賛されている名建築の多くは「これだ、我が家には床の間も仏間もない」なるべくニュートラルな空間を作り（我が家は洋室が3室+和室が1室あるがどれが寝室でどれが子供部屋か判らず季節」として家中で夫々の拠点を決めている
- ② なるべく量産工業製品（鉄骨、P.B、C.B、タイル・・）を使う（新建材の多さ、多彩さ・・にはウンザリする）住宅も段々と時計や自動車と同じ標準化への道を歩むのではないかと思う、唯そこで建築家による綿密な基本設計が必要になつてくるのだ。

③ 床下・屋根裏・壁厚等・断面図でハツチングする部分をなるべく小

H-100の柱の中に内外壁下地を納めた（見た目には美しいがディテール設計は大変だ・・鉄骨継ぎ手用のボルト頭の処理と設備配管に苦労した）

あれからもう35年になる、リタイヤ後の生活は自由で気儘だが、食事時と昼食後の30分の昼寝と、夜の団欒時以外は、僕は居間を離れ、なるべく自分の「仕事部屋」に籠るようにしている、哀しいサラリーマン生活40年の風習だ。幸いにも退職・還暦祝いに妻・子供達から貰つた「アーロンチュー」の快適さと、何よりも窓を空ければすぐ庭に出で樹々に触れられるという逃げ場があるのがいい。夕方は5時迄机に向かっているのは余りにも哀れなので4時に机を離れるようにしている。

高齢の父母を時々我が家に招くのだが、二人を2階の居間に上げるのにひと苦労する、父を横に抱きかかえ、母は両手をついて這いつよいじてやっと2階に辿り着く。居間が2階にある我が家の中階段は普通の住宅でも珍しいほど緩やかな階段（踏面285 踏上162）のはずだがそれでもこの有様である。そりやそうだろう、今や5センチ、1センチの段差すら無くすほどの「バリヤフリー」の中だ。もうすぐ70代に入りしょとすると我ら健康夫婦もあと何年でこの2階を放棄しなければならないのだろうか、父は88才の時、脳梗塞に見舞われた。